

訃報

東京蜘蛛談話会の産みの親である萱嶋 泉先生が9月30日に永眠されました。いつか必ずこの日が来るとはわかっていながらも、どこかで永遠の生命を夢見ていたような気がします。ついに避けては通れない現実を突きつけられてしまいました。

キシダイア 89号では、萱嶋 泉先生の追悼特集を組みます。追悼文の切りは2005年12月末日といたしますので、池田博明あるいは谷川明男までお送りください。原稿はメール本文が添付ファイル、またはファイルを入れたFDやCDなどでお送りください。ワープロやコンピュータをお使いでない方は手書き原稿でもけっこうです。

2005年度 東京蜘蛛談話会 11月例会

- 1.日時 2005年11月27日(日) 10時より(開場9時30分)
- 2.場所 東京環境工科専門学校 〒150-0011 東京都渋谷区東 2-5-3
「JR 渋谷駅」東口(東急文化会館側)より、「学03日赤医療センター行」バスにて約5分、「國學院大學前」下車、徒歩1分、170円
- 3.連絡 当日、東京環境工科専門学校の電話が使用できないので、緊急時には以下に連絡ください。加藤輝代子 090-7012-6458 初芝伸吾 090-6156-8378
- 4.その他 プロジェクター、OHP等用意いたします。
- 5.同封のはがきで、氏名、連絡先、出欠、講演の有無、講演ありの場合には演題と使用希望機材(スライド、OHP、コンピュータ)をお知らせください。また、近況をお知らせいただくと幸いです。また、はがき以外の手段で下記にご連絡いただいてもけっこうです。

〒186-0002 東京都国立市東 3-11-18-203 有限会社 エコシス
初芝伸吾
mail: hatsushiba-ecosys@h8.dion.jp
Tel: 042-501-2651 Fax: 042-501-2652

渋谷駅東口から徒歩15分です。坂道がありますので、バスを利用した方がよろしいかと思えます。

東京環境工科専門学校及びその周辺には駐車場ありません。

会場案内図は、本通信の最終ページをご覧ください。

2005 年度採集観察会

1. 期 日： 第3回 10月16日(日) 第4回2月19日(日)
 2. 場 所： 弘法山(神奈川県秦野市)
 3. 集 合： 小田急線 鶴巻温泉駅北口改札 10時集合
 4. 世話人： 池田博明
- 新宿発 8:41 の急行は 9:44 に鶴巻温泉に着きます。
町田始発 9:25 の急行は 9:55 に鶴巻温泉に着きます。

5月15日(日)の観察会 於：弘法山

行程：小田急線鶴巻温泉駅 吾妻山で昼食 善波峠の中間点で折り返して駅に戻る
参加者：赤羽尚夫, 安藤昭久, 池田博明, 泉宏子, 泉千陽, 内田邦雄, 及川照代, 小澤實樹, 片野均, 笠原喜久雄, 加藤時雄, 加藤むつみ, 唐沢良子, 工藤泰恵, 小島幸恵, 小林倫子, 小峰光弘, 斎藤慎一郎, 貞元己良, 佐藤幸子, 新海明, 寿福美喜男, 寿福邦子, 寿福芙美哉, 高津素夢, 谷川明男, 土屋昌利, 中島晴子, 永井亜紀, 萩野康則, 萩野穰, 日置乃武子, 水山栄子, 八幡明彦



参加者一同

クモ仮目録（和名 50 音順）

アオオビハエトリ，アオオニグモ，アサヒエビグモ，アシプトヒメグモ，アズチグモ，アリグモ，イワワキアシプトヒメグモ，ウズグモの一種，ウデプトハエトリ，ウラシマグモの一種，エキスハエトリ，エゾアシナガグモ，エビチャヨリメケムリグモ，オオシロカネグモ，オトヒメグモ，オナガグモ，カタオカハエトリ，カニミジグモ，カネコトタテグモ，カラスハエトリ，キシノウエトタテグモ，キハダカニグモ，キベリミジグモ，キンイロエビグモ，ギンメッキゴミグモ，コムラウラシマグモ，クサグモ，コアカクロミジグモ，コアシダカグモ，コクサグモ，コケヒメグモ，コハナグモ，コシロカネグモ，ゴミグモ，ササグモ，サツマノミダマシ，ザラアカムネグモ，ジグモ，シシヌカグモ，シボグモ，シモフリミジグモ，シャコグモ，スネグロオチバヒメグモ，チビアカサラグモ，チュウガタコガネグモ，チュウガタシロカネグモ，チリイソウロウグモ，ツクネグモ，デーニッツハエトリ，トラフワシグモ，ネコハエトリ，ノジマモリヒメグモ，ハツリグモ，ハラナガヒシガタグモ，ハリゲコモリグモ，ヒメカラスハエトリ，ヒメグモ，ヒラタグモ，フタオイスウロウグモ，マイコフクログモ，マミジロハエトリ，ムツトゲイセキグモ（？．幼体），ヤサアリグモ，ヤチグモの一種，ヤハズハエトリ，ヤマシロオニグモ，ヤマジハエトリ，ヤマトフクログモ，ヤミイロカニグモ，ユウレイグモ，ヨダンハエトリ，ヨツデゴミグモ，ワカバグモ

本の紹介 錦三郎『飛行蜘蛛』笠間書院

池田博明

クモは自分が出す細い糸を利用して空を飛びます．利用されたクモの糸は集まり漂って赤湯地方では晩秋の風物詩となり，「雪迎え」という美しい言葉で呼ばれていました．

錦三郎氏は赤湯の小中学校で教鞭をとりながら，雪迎えとクモの飛行の研究で日本のこの分野を開拓しました．

「雪迎え」探索の日々を綴った『蜘蛛百態』（昭和三十九年二月，自費出版）はその年の第十二回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞し，その増補改訂版が丸の内出版の『飛行蜘蛛』（昭和四十七年）でした．錦氏のこの本は雪迎えを自然科学的に考察するだけでなく，「遊糸」として漢詩や和歌に詠まれたり，世界各地で「ゴッサマー」として知られていた文献を渉猟した飛行蜘蛛エンサイクロペディアでした．残念ながら品切になっていましたが，このたび笠間書院から，復刻されました．口絵にカラー写真が挿入されたほか，版が大きくなり，読みやすくなりました．

錦氏が「雪迎え」に興味を持ったきっかけは短歌の会の指導者であった結城哀草果氏の新聞エッセイだったそうです．すぐ顕微鏡で「雪迎え」を見たのが昭和十三年，ちょうど氏が二十四歳のときでした．しかし，戦争があり，雪迎えのクモが実際に確認できたのは昭和二十六年の十月だったそうです．それから氏の空を飛ぶクモの研究が本格化したのです．

私は山形県出身で、錦氏の三省堂新書『雪迎え』（昭和五十年）で初めてこの郷土の美しい言葉を知りました。さらに『飛行蜘蛛』を探して古書店をまわった日々が昨日のこのように思い出されて、感無量です。錦氏は平成九年五月に逝去されましたが、復刻に当って子息の錦仁氏が書かれた解説によって、自然の改変によって、現在は「雪迎え」現象がほとんど見られなくなったことを知りました。

復刻による新たな読者との出会い、錦作詞の合唱組曲『南陽讃歌』の再評価と共に、蜘蛛の飛行の復活を願いたいと思います。
「山形新聞」2005年7月

Japanese Spinnen100周年記念 佐賀合宿に行ってきました！

永井 亜紀

「100周年」と聞いただけで、なんだか「ありがたい」気持ちになるというもの。期待に胸をふくらませ、7月30日～8月1日まで2泊3日の合宿に参加してきました。宿泊地は、古文書にも登場するという桃源郷・古湯温泉の山水荘でした。

まずは、「佐賀と土蜘蛛」に関する八幡さんの報告と「Japanese Spinnen100周年記念」についての谷川さんの解説から始まるというめずらしい合宿でした。「組織的に佐賀のクモを調査しよう」という意気込みに溢れていました。

八幡さんがカシミアール3Dを活用して作成した地図を見ると、観察会のメインとなる「湯の原」も「金刀比羅神社」も山のふもとの土蜘蛛の生息地的(?)な場所であることがわかります。また、谷川さんから配られたJapanese Spinnenで佐賀から記録されているクモ一覧の「トラマルグモ」とか「コンピラコモリグモ」などは、なんと「正体不明」だというではありませんか。これはもう、この合宿で確かめなくてはいけない！といやが上にも盛り上がります。

今回の合宿は、雨に見舞われることも多く、また、大型のオニグモ類があまり出なかったのが、オニグモ好きの私にはちょっと残念でした。が、雨にもめげないのが東京蜘蛛談話会。観察採集地は5か所。30日夜：雄淵雌淵、31日午前：湯の原、31日午後：金刀比羅神社、31日夜：湯の原鬼俵、1日午前：万寿寺



トガリオニグモ

でした。私の印象に残ったのは、やはり湯の原と金刀比羅神社です。

湯の原では、しだいに激しくなる雨の中、こうなりゃ、上からも下からも濡れてやれとばかり、本道はずれ、苔むした石の転がる沢に下りて行きました。その途中の林で、私の「何となくわかるクモ」にはまだ含まれていないトガリオニグモを見つけました。クモの種類が私は相変わらず

よくわからないので、「あれ？これは何だろう」と思ったのは、わかる人に見てもらいます。そうして自分の見つけたのが「けっこう珍しい」とか「他の人は見つけてない」ということがわかると、とっても嬉しくなるのです。

日本のクモ研究発祥の地・佐賀ですが、あれ？と思うようなクモが記録になかったりします。そこで、「いてしかるべき」クモ探しにも熱が入ります。新記録として、アカイトトリノフンダマシやオオトリノフンダマシなどが各所で見つかっていました。金刀比羅神社で、私は裏山を上へ上へと登っていき、アオオニグモとシロオビトリノフンダマシを見つけました。「佐賀新記録！」フッフッとひとり含み笑い(傍目にはかなり気持ち悪かろう)。その帰り、山道の脇から子猪が突然飛び出してきて思わず声をあげました。ビックリしたのは、子猪も同じでしょうけど。

今回、初めてシマササグモを見ましたが、とてもきれいなクモでした。まどいをしている子グモを見守っている親の姿が凜として美しかった。

毎年、何か新しい発見のできる談話会の合宿はやっぱり大好きです。また、いろんな世代が混ざっているのも魅力です。今回、ついに談話会デビュー(?)となった大阪のスーパー小学生・池田君。関西の会ではおなじみの知る人ぞ知るスパイダー少年です。私はこれまで加治木クモ合戦と関西の観察会で会っているのですが、会うたびに彼のクモに対する情熱はすごいなあと思います。今回も熱心に観察採集をして、クモあわせでも、どんどん自分が採ったクモを言ったり、夜遅くまで質問している姿には、感嘆しました！

合宿には地元の記者が取材に来ていて、佐賀県のホームページにも「クモ研究発祥の地、佐賀県でクモの観察採集合宿」と写真入りで紹介されました。そこに載っている写真がまた、非常に楽しげな談話会の人々の姿をとらえており、ああ、私たちってこんなに楽しそうなんだ！とほほえましいです。一度ご覧ください。

<http://www.pref.saga.lg.jp/at-contents/kenseijoho/koho/mailmaga/num/050817.htm>



アオオニグモ



シロオビトリノフンダマシ



ライバル

西表島日記(1)

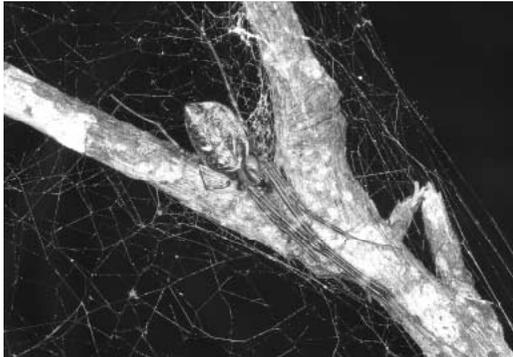
谷川明男

2005年4月19日

石垣空港から西表行きの船に乗る離島棧橋まで利用したタクシーの運転手とは3回目の遭遇だった。なんでそんなことを憶えているかというと、最初に乗ったとき、この人は私にヤマンギの話をした。石垣や西表の山には、刺されると死んでしまうヤマンギという虫がいるから気をつけろというのだ。加藤倫行君と一緒に西表に来たときに2回目の遭遇を



ヤマンギと呼ばれて恐れられている
クヌギカレハの幼虫



オオハラダカグモ



リュウキュウセンショウグモ

した。何しに来たと聞くので、虫を見に来たという、やはり山には刺されると死んでしまう虫がいるから気をつけろという。そのときは、こちらからヤマンギだね、と先手を打った。そして今回は、ヤマンギの話は出なかったが、横断歩道をたくさんの人が渡っているとき、いらいらして「はあ、これみんな渡るまで待たせるのかなあ」と文句を言ったその口調があのおじさんのものだったのだ。加藤君と来たとき、前を農業用の車両がゆっくりと走っていると、やはりいらいらして「はあ、こんなにしつこく走るとかなあ」と文句を言ったあの口調だ。このヤマンギというのは何のことを言っているのか、行きつけのうえはら館のおばあちゃんの話からすると、どうもクヌギカレハの幼虫のことらしい。なぜあの虫がそこまでの迷信を産んだのかはわからないままである。

初日の夜間観察は、船浦集落奥の小さな沢にした。ここは、数年前にオオハラダカグモを見つけたところで、数の減少が気になっていた。ただの偶産で終わるか、外来種として定着するのか。駐車場代わりに使っている空地に着くと、燈火採集をしている人がいた。ここで燈火採集の明かりを見るのは2度目だ。沢に入る手前で、アシダカグモの大きめの幼体がアダンの葉にとまっていた。われわれの身の回りでは完全に屋内性のアシダカグモも、本来はこうやって野外で暮らしているクモな

のであろう。沢に入るとすぐにオオハラダカグモのメスがいた、と、その網の上隅にはオスもいる。そのむこうにももう1個体メスが見える。まだ生息しているようだ。小さな支流のほうへ入っていくと、水面すれすれにヤサガタアシナガグモが網を張っている。そして、さらにオオハラダカグモのメス2個体、オス1個体を発見した。葉裏で卵のうを守っているタニカワアシナガグモや、糸を伝わって移動中のリュウキュウセンショウグモの雄なども見られた。昨年6月に、ここではじめてのオスを発見したイシガキアオグロハシリグモは、幼体すら1個体も見つからない。と、次の瞬間、いくつもの懐中電灯の光のすじが見え、一筋向こうの沢からなにやら話し声が聞こえてきた。この沢で夜に人に会うなんて、22年間の西表歴の中で2回目だ。なんだどうしたんだ。前回ここで会った人は、西表のガイドブックなどを出版しているプロカメラマンの横塚さんだった。まあ小動物の撮影が専門の人だから、さもありなんといったところだったが、いまここにいる集団は何かを説明する人とそれを聞いている人から成り立っている。エコツーリズムがついに夜の林内にも現れたのだろうか？説明している人の話し方は明らかに内地の人間だ。うーむ、これは複雑な気持ちだ。自然がお金につながるとなれば、大切にもらえるであろう。しかし、自然とのふれあいはガイドしてもらうものなのだろうか？単にちょっとだけジャングル気分を味わいたいだけの人々が来はじめると、ハブが出るからとかいって道の両側の草を刈り込んだり、歩きやすいように小道に砂利を敷いたり、休めるようにベンチができたりしないだろうか？実際、私がモダマひろいのポイントにしていた場所の一つにはそのようになってしまった場所がある。そして、ある有名人が、そこを歩いたときの感想文をJTAの機内誌に書いていた。西表島も少しずつ変貌してきた。そういえば道路標識に動物注意というやつが、新たに設置された。おおっ！西表にタヌキが出るようになったのか？と思ったらその図柄はどうやらヤマネコのようなようだった。

4月20日

今日はまず白浜林道に入った。旧道ががけ崩れのために通行止めになっており、白浜側からしか入れない。崩れたのは、昨年秋の台風のときであるが、工事期間は今年の3月から7月と表示されていた。まあこの道がこの



新たに設置された
動物注意の道路標識



ミツバチの一種を捕らえた
オキナワアズチグモ

まま通行不可能になっても困る人はほとんどいないだろう。林道入り口までは白浜側から入れるので、営林署や環境省の役人も自然観察愛好者も困らない。

びっくりしたのは今日も人だった。林道に入ってすぐに私の後ろからもう一人おじさんが歩いてきた。ここで山仕事以外の人に会うのはすごく珍しい。しかもこのおじさんは自然愛好家でもない普通の旅人であった。この人には何をしているのかと聞かれたので、クモを見に来たといつて、シロノセンダングサの花で、オキナワアズチグモが自分の体よりも大きなミツバチの一種を捕らえているところを見せてあげるとえらく感動していた。そしてさらにその後から、リュックを背負った若者が一人歩いてきた。お互いに関係のない人間がこの道に3人いるというのは初めての経験である。前に人が3人いたときは、私と平松さんと新海さんだった。

ふと見た葉の上に、緑の金属光沢をしたきれいなハチがおり、クモを持っている。何グモかと思って、取り上げて見てみたらヤハズフクログモの幼体であった。ハチは怒って私の指を刺してきた。クモを確認した後、葉の上に戻してやるとハチはすぐにやってきてまたくわえなおしていた。

少し先でイリオモテキムラグモの標本を採集するために小さな沢に入ると、そこに2mくらいもある大きなサキシマスジオがいた。沢を完全に横切っていたので最初は落ち枝だと思ったくらいである。このヘビは無毒でおとなしいヘビである。とりあえず写真を撮影したが、のびているヘビの写真は、後で見るととてもつまらない。とぐるを巻いてもらおうと思って体をつついたが、悠然と移動し、近くにあった穴にするすると入ってしまった。



西表島では珍しいヒル

イリオモテキムラグモを採集し、置いてあったリュックを持ち上げると、その下に大きめのヒルがいた。これは珍しい。西表でヒルを見るのは2回目だ。ムシペールを吹き付けると、私に向かってくるのをやめて落ち葉の下へもぐりこんでいった。

13時半くらいになると、予報どおり雨が降ってきたので、昼の観察を中断して宿に戻った。こんなにぴったりと予報が当たるのはとても珍しい。

夜も白浜林道に出かけた。とにかくびっくりしたのは、林道入り口に先着の車が3台もあり、林道には10人ほどの人がいたのだ。ホタルウォッチングであった。ここにはホタルがたくさんいる。マドボタルの幼虫なら季節を問わずに光っている姿を見ることができし、今はちょうどヤエヤ



ヤエヤマボタル

マボタルの飛ぶ季節だ。実際、林道脇の林内にはピカピカと早い点滅を繰り返しながらたくさんヤエヤマボタルが飛んでいる。私が着いた時刻には発光のピークが過ぎたころだったので、他の人たちは次々と帰っていき、林道はいつもの静けさを取り戻してくれた。しかし、ここで出会った人の数の新記録樹立である。何で急にこんなにホタルブームになったのだろう。いままではどんなにホタルが乱舞していようと見に来る人などぜんぜんいなかったのに。イリオモテボタル発見が原因だろうか？ヤエヤマボタルは人工の光にも反応する。発光時刻が過ぎ、ほとんど光らなくなっても、ヘッドランプの点滅機能を利用してあたりに点滅光を当てると、短時間ではあるが、そこそこで光りだす。飛び回っているときにはほとんど写真など撮影できないが、ピークを過ぎると葉の上で休んでいるので、点滅光を当てて光らせ、場所を確認すればけっこう楽に写真を撮ることができる。帰ってからインターネットで調べると、西表でもいろいろなガイドツアーが行われているようだ。ヤエヤマボタルの観察会の参加費は2000円だということだ。良いのか悪いのか。まあ今までの方針通り、その筋とは無関係でい続けよう。

クモはというと、草に登っているカマスグモをかなり見ることができたし、タニカワアシナガグモの団居や、リュウキュウヒメグモ、卵のうを持っているコアシブトヒメグモなどが見られた。また、ホソミアシダカグモの幼体がゴキブリを食べていた。野外でゴキブリを食べているアシダカグモ類を見たことはいままでもあまりなかった。

4月21日

今日の午前中はクーラ川の河口に出かけた。森の中へと歩いていくと、ヒヨドリやカ



カマスグモ



卵のうを保護している
コアシブトヒメグモ



ゴキブリを捕えた
ホソミアシダカグモ

ンムリワシと一緒にリュウキュウアカショウビンが盛んに鳴いている。たくさんいる割にはなかなか姿を見ることができなかったが、ふとモダマのつるを見上げていたときに偶然目の前の枝に止まり、その真っ赤な姿を見ることができた。

沢に降りる小道で、ふと見た地面にヒノマルコモリグモのオスを発見した。また、ハナナガイソウロウグモはチブサトゲグモの網とムネグロサラグモの類似種の網とにいそろう



ヒノマルコモリグモ

うしていた。このイソウロウグモは夏の間はオオジョロウグモの網でよく見られるが、オオジョロウグモがいないときには複数のタイプの網にいるようだ。

午前中はやっと誰にも会わない世界を満喫することができた。西表島の最大の魅力は、この人のいなさだ。まるで自分の島であるかのようなのである。今の時代にこんなぜいたくな時間を過ごすことができる場所はそうないだろう。



セイロンアシナガグモの交尾

午後は浦内川近くの旧廃車置場の奥の耕作地にチリイソウロウグモを探しに出かけた。ハイビスカスの植え込みに張られたキヌアミグモの網が15、そのうち2つにチリイソウロウグモのメスが1個体ずつおり、一方には卵のうもつけられていた。また、4つにはシロカネイソウロウグモがいた。その後、系統解析用のキイロハラダカグモの標本の採集に美田良へ行ったのだが、そこでオオハラダカグモの雌を見つけた。船浦以外で見るのは初めてだ。広く定着しているのだろうか。



中央部の拡大
雄の牙が雌の第1脚を押さえている

夜も同じ耕作地に出かけた。ここはニホンミナミアシダカグモを発見した場所である。その当時は採集に専念していて写真をほとんど撮っていなかった。写真を撮るようになってから、どうしても撮影したくて常に探し続けられているのだが、どうしても発見することができない。あちこちでセイロンアシナガグモが交尾しているのが見られた。このクモは一年中いつでも成体が見られるので、交尾も一年中行われていると思うのだが、こん

なにあちこちで交尾しているのを見たのははじめてである。交尾中のペアに別のオスが近づいてきたりもしている。やはりシーズンがあるのであろうか。さて、セイロンアシナガグモの交尾を撮影した写真を後で見ても気がついたのだが、セイロンアシナガグモのオスは、牙で雌の第一脚を押さえ込んでいる。プリストウの本で見た図も、自分で観察したハラビロアシナガグモの交尾でも、オスは上顎と牙を用いてメスの上顎と牙を押さえ込んでいた。最初のペアだけの偶然かと思ったのだが、2ペア目も同じであった。現地では気がつかなかったのも、それ以上の観察はしなかった。今度機会があったら観察の例数を増やしていきたい。

少し奥へはいったところにツツゲホウグモの網があり、クモは何かガを捕食していた。ツツゲホウグモの仲間はたいへん目の細かい網を張るので、ガを捕食しているのではないかといわれていたが、その現場を見ることのできなかった。今回たった一例ではあるが、ガを捕食している現場をおさえることができた。今後例数を増やしていった餌メニューを明らかにしたいものだ。二つの卵のうを持ったウロコアシナガグモのメスは、その下に小さな網を張っていた。ニホンミナミアシダカグモは今回も見つけることはできなかった。そして帰り道、私の懐中電灯の光に驚いて、イノシシが一目散に逃げ去っていった。こっちに向かってこなくてよかった。(つづく)



ツツゲホウグモの目の細かい網



ガを捕食しているツツゲホウグモ



ウロコアシナガグモと
その卵のう

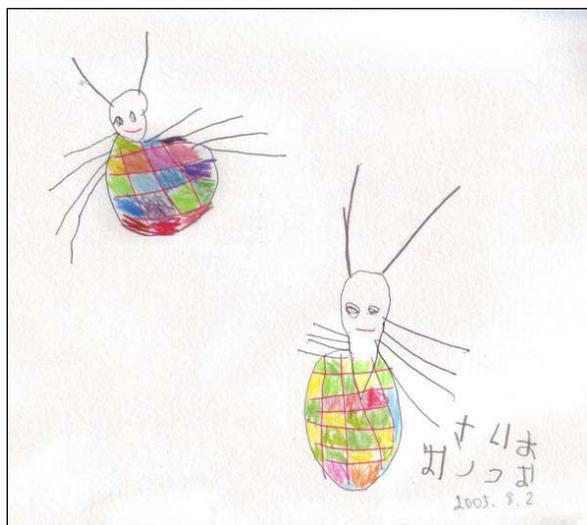
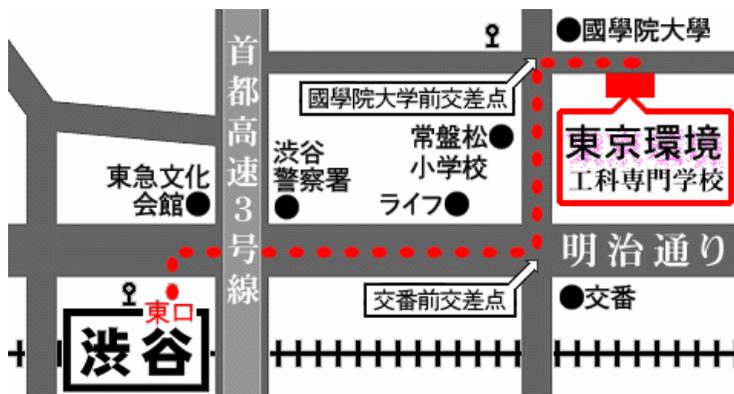
東京蜘蛛談話会の会費は、一般 3800 円、学生 2000 円です。

郵便振替口座 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会へお願いします。

会費のことは：

会計担当：安田明雄 231-0861 横浜市中区元町 5-219 (TEL：045-641-0763)

E-mail：kobato@gol.com



初芝秋沙ちゃん作

入退会は：

事務局 初芝伸吾 186-0002 東京都国立市東 3-11-18-203 (有)エコシス
E-mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

通信原稿投稿先：

通信担当 谷川明男 247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416
E-mail : dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

談話会通信次号の原稿締め切りは2006年1月末日です。ご投稿お待ちしております。

KISHIDAIA 原稿投稿先：

会誌担当 池田博明 258-0018 足柄上郡大井町金手 1099
E-mail : fwgd9084@mb.infoweb.ne.jp

KISHIDAIA 次号の原稿締め切りは2005年12月末日です。ご投稿お待ちしております。